



「肥前国産物図考」(佐賀県立博物館蔵) 玄界灘の捕鯨

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

20 March 2003

No. 130



レポート

常設特別展「肥前国産物図考の世界」

はじめに

佐賀県立博物館では、2003（平成15）年1月31日から同3月2日まで常設特別展「肥前国産物図考の世界」を開催した。休館日を除く27日間の会期中に7,054人の方々に観覧していただいた。

唐津藩士木崎盛標作の肥前国産物図考は、18世紀の唐津藩領内でおこなわれていた唐津焼や捕鯨など23件の生業を活写し、庶民のくらしづくりを生き生きと伝える資料である。1995（平成7）年には佐賀県重要文化財に指定された。

今回展示した肥前国産物図考は、佐賀県立博物館が所蔵するもので折畳8帖からなり、縦約27cmで幅は横に広げると1帖あたり5メートルから12メートルにおよぶ。8帖すべてを横に並べると54メートルにもなる大作であり、当館では8帖すべてを一挙公開するのは今回が初めてであった。また、新たに所在が確認された肥前国産物図考（計3巻）を初めて紹介した。当館所蔵の肥前国産物図考は8帖とも写本であるが、新たに確認された3巻のうちの2巻は、いずれも落款を有し、原本の可能性が期待されるものである。

展示と構成

今回の展覧会は、肥前国産物図考（全8帖）を一挙公開し、唐津地方の失われた世界を訪ねながら、現代につながる佐賀県の産業や生活の原風景を探ろうというものであり、あわせて、肥前国産物図考に描かれている生業の道具類や描かれた場所の現在の風景写真なども展示し、過去と現代を視覚的に重ね合わせながら、唐津地方の歴史的特色を明らかにすることも試みた。

展示は美術館の2室でおこなった。第1帖から順に展示するのではなく、描かれた内容や展示室の構造から、次のような展示構成とした。

- I 肥前国産物図考の時代
- II 唐津の物つくり
 - 1 城下の諸職（第5・8帖）
 - 2 近代産業への歩み（第7帖）
- III 玄海の海と川
 - 1 玄海の漁取り（第4帖）
 - 2 馬渡島の自然とくらし（第1・2帖）
 - 3 海と川のなりわい（第6・3帖）

Iで肥前国産物図考で描かれている地域や時代につ

いて説明し、IIで城下や周辺村落での生業、IIIで海や川での生業を紹介した。パネルは、大・中項目に加え、数か所にコラムパネルを掲示した。肥前国産物図考の解説は、全8帖をつぶさに読み下すのではなく、生業ごとにB5版の簡潔な解説を付した。さらに展示ケース内には、肥前国産物図考とともに関連する諸資料をあわせて展示した。それらは、古文書や屏風などの歴史資料というよりむしろ民俗資料が主で、考古資料も含め多種類におよんだ。さらに、当館の肥前国産物図考の第1・2・6帖は、原本の可能性を秘めた新資料と並べて展示し、比較しやすいように工夫した。

以下、展示構成に沿って同図説の概要を紹介する。

I 肥前国産物図考の時代

肥前国産物図考の製作は、1773（安永2）年から約10年間かけておこなわれた。

江戸時代中期の18世紀に入ると、社会基盤となる農業・水産業の生産が向上し、商工業が発展する一方、幕府をはじめ全国諸藩では財政の建て直しがされ、新田開発や新たな産業育成に力を注ぐようになった。徳川吉宗の時代1730年代に幕府が全国諸藩に命じて作成した『諸国産物帳』は動植物・農産物・鉱物などを絵入りで記録したもので、以後、全国各地で地場の産業に関心を向けた産物帳が盛んに作られるようになった。肥前国産物図考は、そのような殖産興業の時代を背景に、唐津藩領内の特色ある生業を木崎盛標が実際に見聞し詳しく記録したものである。

II 唐津の物つくり

肥前国産物図考が描かれた時代の唐津は、藩主が土井氏から水野氏にかわってまもないころにある。当時の唐津藩における産業の中心は農業および漁業であったが、生産技術の向上や流通経済の発達に支えられ、庶民生活に必要な多様な物資の製造、伝統の唐津焼きの隆盛、さらには石炭採掘の本格化など新たな産業もさかんになり、城下では商工業が発展した。藩でも、財政建て直しのため各種産業への課税と支配を強化する一方、海産物・和紙・石炭などを専売品として扱うとともに、これらを特産品として奨励し、結果として領内の産業振興に一役かった。

1 城下の諸職

第5帖には、布晒しや鉄物師、線香製を描く。いずれの生業も唐津城下でおこなわれていたものである。

図1



布晒しがおこなわれていた場所は唐人町（現在の本綿町付近）とあり、町田川を利用していた。図1には、川に入って晒す人々、岸で布をたたいたり干したりする人々の絵とともに、文字で「木綿布などを堅炭（ナラ・カシ・クリなどの炭）の灰汁につけ、そのまましばらく川に浸し、板にのせて叩いて干すこと一日に二度行なう」、「これを十五日から長ければ三十日も繰り返すが、日数により品質に違いが出てくる」とある。

図2



鉄物製造は大石町と鐵屋の2か所で営まれた。コシキという円筒形の炉に原料となる鉄錠と木炭を入れ、裏方では踏鞴（ふいご）を踏み、風をコシキに送る。さらに、沸き立った溶鉄はコシキのモラシ口から湯汲みで受け、鋳型に注ぎ、鍋をつくっている（図2）。

図3



線香づくりは本町でおこなわれた。杉の葉などの原料を踏臼で細かく碎いて粉にし、筋にかける。これを布海苔で練り筒に入れ、チャクハンというテコを利用した道具で線香の形にしほりだしている（図3）。

図4



第8帖には紙漉について記す（図4）。原料の楮を釜で蒸して皮を剥ぎ、清流につけてもみ、表皮の黒皮をとる。これを乾燥後、灰汁で煮て漂白し、水にさらす。さらに棒で叩いて絲状につぶし、漉船に入れて植物根の黄蓮（糊）とよく揉き混ぜる。この液を簀柄でくつて1枚1枚漉き上げ、押掛板で挟んで水をしづらし、張板で干し上げる。これらの工程が、そこではたらく人々の姿とともに実に生き生きと描かれている。

2 近代産業への歩み

第7帖には石炭採掘と大漿づくりを記す。

図5



図5の採炭図は日本最古のものとして知られる。北波多村の岸岳の北西、岸山（ドウメキ）での採炭のようすを描く。掘り出された石炭は川船に積み、徳須恵川を下って、松浦川河口の瀬島まで運ばれた。

図6



相知町の押川は、大漿の生産地として有名であった。その製作技法の特徴は「粘土紐の巻き上げ」「叩き道具による叩き」「蹴り輪轆の使用」にあった（図6）。生活必需品の大漿は、水漿や穀物容器、醸造用容器として利用された一方、埋葬用の棺としても利用された。

III 玄海の海と川

江戸時代の唐津地方では、沿岸部だけでなく、小川島や馬渡島などの島々を含めて漁業が発展し、藩もこれを奨励した。最もよく知られるのは小川島捕鯨である。また、山間部から流れ出す松浦川、玉島川などの流域では、唐津城下にはど近いあたりでも、こんにちでは見られなくなった覓採りや鵜飼いなどさまざまな特色ある漁労がおこなわれていた。

1 玄海の鯨捕り

肥前国産物図考のハイライトは、何といっても12mをこえる大作の第4帖・捕鯨図である。波立つ海に多

図7



くの船をこぎ出し、鯨を網にからめて鉛や剣を突き刺し、波座士が乗り移ってとどめを刺そうとしている勇壯なさま(図7)、さらには解体から利用法、祝いの宴まで、きわめて興味深く觀察し、克明に記録する。第4帖は西海地方の捕鯨図としては最古のものであり、江戸後期以降、さまざまな捕鯨図説の規範となつた。

江戸時代は、日本各地の浦に鯨組といわれる捕鯨集団が成立した。玄界灘に浮かぶ小川島は、地元・呼子の中尾組が拠点とした。江戸時代の捕鯨は、まず、鉛や剣で突き仕留める突取法が行なわれ、やがてこれに網を加え網取法が採用された。捕獲にあたる船団は、鯨網を張る双海船、鯨を追い仕留める勢子船、仕留めた鯨を納屋場まで運ぶ持双船など40数隻からなり、これにかかわる人員は、納屋場で肉や骨などを加工する人も含めて総勢4~5百名を数えた。

2 馬渡島の自然とくらし

木崎盛標は、馬渡島の馬牧や鹿狩り、鷹の雄捕りなどについて、第1帖と第2帖にわたり詳しく書き記している。馬渡島は沖合7kmに浮かぶ周囲11kmの小島にすぎない。しかし、古来、大陸交通の中継地であり、また江戸時代の初めに幕府の彈圧を逃れたキリシタンが長崎方面から移り住むなど、特徴的な島である。

図8



第1帖は馬牧について記す(図8)。当時、馬渡島には唐津藩直営の牧場(馬牧)があった。駒捕は例年2月の月初卯日と定められ、島の最大の行事であった。捕獲された馬は、松浦川河口・鏡地区の牛馬市で年3回競り売りされ、農村の役畜として利用された。

図9



第2帖では、鹿狩・鷺狩・鷹の雄捕りなどを記す。

図9には、鹿の通り道に勢子を遣らせて囲い込み、犬を入れて鹿を追わせ、待ち伏せた獵師がこれを鉄砲でしとめる方法が記録されている。当時、馬渡島では鹿の肉を食べる習慣ではなく、捕えた鹿は皮を剥ぎ、肉は鷺を打ち捕るためのオトリに利用した。

図10



図10は鷹狩り用の鷹の雄を捕獲しているようである。江戸時代には、鷹匠の職制ができ、鷹狩り用の鷹の育成にあたった。当時の馬渡島には鷹が巣を掛ける場所が、大藍木浦と赤瀧の2か所あると示されている。

3 海と川のなりわい

第6帖では江猪漁や鮎網、鰐網、海士といった玄界灘での生業、第3帖では鶴飼いや諸鷹網、生海鼠柵、長竿、鮎魚漁、掛け網といった玄界灘やそこに注ぐ河川での各種の網漁などが描かれている。

図11



図11は網で一度に江猪の群れを捕獲する追い込み漁のようである。湾に入ってきた江猪は、まず棒で海面や船縫を叩いて脅し群れを岸に向かわせ、立切網で退路を断つ。さらに内側に網を張って海岸に追い詰め、最後は地引網で群ごと引き上げる。肉の臭みをとる血抜きのようす、獲物を盗んでこっそり隠しておいてあとで売り払うカンダラという習俗も描かれている。

図12



松浦川上流、相知町の伊岐佐川ではかつて鶴飼いがおこなわれていた(図12)。ここでは徒行鶴という鶴飼いの方法が描かれる。闇夜に船で漕ぎ出し、篝火をと

もし、1人が10数羽の鶴を造る長良川の鶴飼いとは、その漁法がかなりちがうと記されている。

写本と原本

今回の展覧会では、新たにその所在が確認された3巻の肥前國産物図考を初公開した。これらの巻は、原本はもちろん写本でさえもその発見例が少ないため、原本の謎を解くだけではなく写本の系譜を探る意味でも、その発見の意義は大きい。さらに、本3巻のうち駒捕を描いた巻および^{いわらきよしひこ}江事を含む巻の2巻には、落款（作者の署名と押印）がある。現在、原本であるといわれているものは2点確認されていて、1点はアメリカ合衆国マサチューセッツ州のビーポディー＆エセックス博物館にある捕鯨の図の1巻、もう1点は奈

良県の天理図書館にある紙漉きの図の1巻である。もちろんいすれにも落款があり、前2巻のそれと共に通する部分も認められる。



新たに所在が確認された肥前国産物図考

(学芸課 平野 剛)

常設特別展「肥前国産物図考の世界」展示資料一覧

II 唐津の物づくり

1 / 42 下 0.2 秒

冬 多毛而辐射状肉质植物	2次 直根和肉质根	长根的肉质植物
石竹科 紫堇科 堇菜科 罂粟科 桔梗科 桔梗科 桔梗科	直根 直根 直根 直根 直根 直根 直根	直根山毛榉 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 直根 直根 直根
毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科	块茎 块茎 块茎 块茎 块茎 块茎 块茎	根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎
毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科 毛茛科	块茎 块茎 块茎 块茎 块茎 块茎 块茎	根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎 根茎球茎及块茎

2 近代産業への歩み

— 1 —

北海の海と川

支那の船と川	支那の船と川(第四回)	江戸時代	吉賀島立博物館	吉賀島底文化財
支那の船と川	支那の船と川(第四回)	江戸時代	吉賀島立博物館	吉賀島底文化財
大宝丸	1点	昭和時代	吉賀島立博物館	
小舟	1点	昭和時代	吉賀島立博物館	
アラマツ	1点	昭和時代	吉賀島立博物館	
シロナガスクジの解体瓦ハサウ	1点	昭和時代	吉賀島立博物館	
小舟	1点	江戸時代	吉賀島立博物館	
アラマツ	1点	江戸時代	吉賀島立博物館	

2馬鹿島に生産る

日本の古生物学	世界の古生物学
地質と古生物	1巻 日本時代
地質と古生物選考(第一編)	1冊 日本時代
地質と古生物選考	1冊 日本時代
地質と古生物選考	1冊 日本時代
地質	17冊 -
マダラ	1冊 -
マダラ	1冊 -
マダラ	1冊 -
地質	2冊 日本時代

3海と川のなりわい

レポート

常設特別展「消えゆくいきものたち」

平成14年度佐賀県立博物館常設特別展「消えゆくいきものたち」は、2002年7月12日(金)から9月1日(日)まで、夏休みなどもミュージアム2002の一環として開催し、月曜休館日を除く45日間の会期中に8848人の入場者を迎えた。今回の展覧会のテーマは、「佐賀県の絶滅のおそれのある動植物一レッドデータブックさがー」が発行されたのを受けて、県内の希少動植物の標本を展示し、身近な環境に目を向けるきっかけになればということであった。その象徴として、佐賀県立三養基高等学校が所蔵しているトキの剥製(野生絶滅)



トキ（三養基高校所蔵）

を最初に展示了。非常に貴重なものであり、トキを見に来たという人も多かった。こどもを対象とした展覧会であったが、淡水魚の水槽展示やトンボ類の標本は、こどもたちよりも昔を懐かしむ大人の方が感激する姿が多く見られた。思っていた以上に幅広い年齢層に受け入れられ、反響が大きかった。また、小学生を対象に展示品をじっくり観察すればすべて解答できるクイズ形式のワークシートを作製し、会場入口で配布した。家族連れなどは親子で取り組み答え合わせをしていた。答えは入口の横に掲示し、記念に受付でスタンプを押した。全問正解するまで、何度もチャレンジする姿が見られた。

付随事業として、7月23日(火)から25日(木)まで『昆虫・植物標本作製教室』を、8月1日(木)・2日(金)にギャラリースケッチ『いきものの色と形』を、8月3日(土)に野鳥観察会『佐賀城公園の夏鳥たち』を開催した。それぞれの事業についてふれる。

まず昆虫・植物標本作製教室だが、募集定員20名のところを幼稚園児(保護者の付き添い有)から中学生の飛び入り参加まであり27名が標本作製にのぞんだ。1日目は、昆虫や植物を採集するときのマナーや標本の持つ意義などを説明したあと、実際に城内公園で昆虫を採集した。夏の強い日差しが照りつけるなか、こどもたちは元気にしてトントン・セミ・チョウなどを捕った。2日目の昆虫標本作製は佐賀昆虫同好会の古川雅通氏を講師に迎え、展翅板と展翅テープ、昆虫針を使って甲虫やチョウの足や羽の形を整えるなどの実習を行った。3日目の植物標本作製は佐賀自然史研究会の上赤博文氏を講師に迎えて、植物の採集と新聞に挟んでの標本作りを行った。きれいな標本をつくるための注意点や正式なラベルの書き方などに注意しながら、実際に自分で採集した昆虫や植物を標本にすることで、生きものに关心を持つ子どもが増えたと思われる。また、きれいに整理された標本を見て、学問的な興味を持つ子も多く、講師にたくさんの質問をしていた。



昆虫・植物標本作製教室

次にギャラリースケッチだが、参加自由としていたのでどれくらい集まるのか心配だった。しかし、開館前から道具持参でかけつけたこどもがいたり、家族や友達同士で参加したり、なかには2日間とも絵を描きに来ることももいて会場はにぎわった。博物館では画用紙、画板、鉛筆、消しゴム、クレヨン、絵の具を用意し、描き上げた作品にはタイトルと学校名、学年、氏名を記入してもらった。その作品は、3号展示室の中央の壁面に用意した色画用紙の本と池にはり、一つの生態系をつくろうというコンセプトで実施した。しかし、予想以上に参加者が多く、予定していた壁面が絵で埋まってしまい、裏側や北側の壁にまで掲示した。大空に羽ばたくハイタカや月夜に飛び回るコウモリ、草原を飛びはねるウサギなど想像力に満ちあふれたもののが多かった。なかには、大人顔負けの正確さで細かい部分まで標本に忠実にスケッチしたものもあった。133枚の色とりどりの動物たちが、会期中の壁面を飾った。



ギャラリースケッチ

最後に野鳥観察会だが、佐賀野鳥の会の栗山千速氏、江口純正氏、久我浩人氏を講師に迎えて、佐賀城公園周辺で多くの夏鳥を観察することができた。当日は天候にも恵まれ、小・中学生とその保護者、計20名の参加者とともに博物館前を出発し、南堀から西堀へと散策しながら城内公園付近で見られる野鳥を堪能した。蟬時雨の中をこどもたちは、望遠鏡を覗いてカササギを観察したり、くちばしの形と鳴き声でカラスを見分ける方法を教えてもらったり、双眼鏡を逆さまに使っ

て実体顕微鏡として使えることを教わったり、堀の中のコケムシを観察するなど、夏の一日を満喫した。



野鳥観察会

以上が常設特別展と付随事業に関する報告である。こどもたちの理科嫌い・理科離れが叫ばれて久しいが、小学校低学年の児童の興味の対象は自然に関するものが多いと感じた。身のまわりの動植物を観察し、素朴な疑問を持つことが理科教育の原点だとすると、そこから科学的な思考ができるか否かを導くのが我々大人の務めである。学術的には十分深く掘りさげるまではいたらなかったが、こどもたちの輝く瞳と笑い声が心に残る展覧会であった。



ワークシートを解くこどもたち

(学芸課 飯田智子)

平成15年度の展示予定

■美術館20周年記念企画展「近代洋画の開拓者たち—アカデミズムの潮流—」

平成15年10月24日(金)～11月24日(月・祝)

日本の西洋画の転換点ともいえる東京美術学校西洋画科の草創期・初期にスポットをあて、佐賀出身の久米桂一郎や岡田三郎助ら指導者たちの業績を概観しながら、藤田嗣治や青木繁など、彼らに学び20世紀を代表する大家に成長した画家たちの作品を紹介する。



岡田三郎助 花野（佐賀県立美術館蔵）

■常設特別展（美術館2・3号展示室）

◎美術館はふしぎの国 平成15年7月11日(金)～8月31日(日)

非現実的な対象を表現した絵画や彫刻、工芸品などを取り上げ、夏休みの子供たちに人間の想像力が創りだしたふしぎの国を楽しんでもらう。

◎肥前佐賀のもののか 平成16年1月30日(金)～2月29日(日)

蒙古襲来から鍋島政権成立までの激動の時代に、佐賀の武士たちがどのように立ち向かったか、その活躍と変貌の姿を古文書や絵図などの資料で追う。

■博物館テーマ展（博物館3号展示室）

◎縄文土器—北と南の出会い＜考古＞ 4／15～6／1

◎続よみがえる肥前刀＜工芸＞ 6／3～7／13

◎生き物のふしぎを見よう＜自然史＞ 7／15～9／18

◎没後三百年 広渡心海＜美術＞ 10／8～11／24

◎肥前の古画を歩く＜歴史＞ 11／26～1／18

◎佐賀のブランド民具＜民俗＞ 3／2～4／18

■美術館常設展

◎近代洋画への招待 4／4～4／20

◎新収蔵品展 4／15～5／11

◎梧竹と蒼海 5／29～6／14

◎書に見る明治の群像II 11／28～12／14

◎郷土の画家たち 9／10～9／18、1／2～1／25、3／5～4／18